

## 明帝の礼制改革について

——“三朝の礼”の成立過程——

藤 田 忠

### 序

筆者は前稿<sup>〔1〕</sup>で、後漢明帝の礼制改革について論じた。その際は“上陵の礼”を中心に据えたものであった。明帝の礼制改革はそれだけでなく、その他に“三朝の礼”もあることを指摘した。しかし指摘のみで詳しく論ずることは出来なかった。そこでこの小稿では“三朝の礼”をとりあげることにする。

前稿でもふれたが、“三朝の礼”制とは何であるのかを再確認しておこう。三朝の礼が始めて実施されたのは、明帝の永平二（59）年のことであった。その模様は『後漢書』明帝本紀に、

二年春正月辛未、光武皇帝を明堂に宗祀し、帝及び公卿列侯始めて冠冕、衣裳、玉佩、紬屨を服して以て事を行ふ。禮畢<sup>ちふ</sup>り、靈台に登る。……三月、辟雍に臨み、初めて大射禮を行ふ。……冬十月壬子、辟雍に幸し、始めて養老の禮を行ふ。詔して曰く、光武皇帝三朝の禮を建てしも、未だ臨饗に及ばずとあり、その李賢の注に、

三朝の禮は、中元元年初めて明堂、辟雍、靈台を起すを謂ふなりとある、三朝の礼とは、明堂、辟雍、靈台で行われる祭祀儀式のことであり、この三朝（宮）は光武帝の中元元（56）年に建造されたが、儀式は未だ開催されていなかった。そこで明帝は永平二年に、光武皇帝を明堂に宗祀し、靈台に登り、辟雍にて大射礼と養老礼を行ったものであることがわかる。明帝が即位の翌年に、三朝の礼をはじめとして、その他の礼制改革に及んだ背景については、前稿で論じたのでここでは省略する。

右のように、光武帝が三朝の礼を計画したが実施できず、明帝即位後に始めて実施した。この三朝について、従来明堂は明堂、辟雍は辟雍というように、個別にその形態や構造等について論じられてはいるが、三朝を一つのセットとして捉えていない。

そこでこの小稿では“三朝の礼”をとりあげるわけであるが、特に三朝の礼を一つのセットとして、三朝の礼が成立する迄の経過について論じることとする。

周知の通り、漢は秦の諸々の制度を継承したと言われている。三朝の礼についてはどうか。先秦時代を別として、秦代からみていくことにしよう。

『史記』の中には、秦代に相当する三朝の姿は見えない。『太平御覧』卷五三引く『三禮圖』に。

明堂は布政の宮、周制は五室……秦は、九室十二階に爲り、各々（帝の）居る所有り

とある。明堂を布政の場所とする考えは、先秦時代の文献に見える明堂観の一説である。九室十二階とは、明堂の構造（形態）について述べたものであり、『周禮』冬官匠人等に見えるものであり、その構造に相違はあるが、この小稿の直接の対象ではないので今はとりあげない。引用の『三禮圖』の著者の不明である。『隋書』卷三二、經籍一に、『三禮圖』九卷、鄭玄及後漢侍中阮諶等撰とあるのが初見であるから、少なくとも後漢時代以降に著わされたものであろう。このように考えると、三朝の礼は秦代にはなかったものと考えて誤りはないだろう。

次に漢代についてみよう。漢代の明堂については既に藤川氏が詳しく論じられているが、筆者は、氏と意見を異にするところがあるので以下に順を追って論述する。

漢代の明堂は、賈山が「治乱の道」について、秦を譬として文帝に

上奏した「至言」の中に見えるのが最初である。『漢書』卷五二、賈山伝に

臣大願に勝へず、願はくは少しく射獵を衰し、夏歳の二月を以て、明堂を定め、太學を造り、先生の道を修めよ。風行はれ俗成り、萬世の基定まる

とある。前半部分は、賈山が文帝に統治に力を注ぐことを諫めたものである。その後に統治を行っていくにあたり、明堂、大学の利用をすすめ、そうすれば風俗の徳化が行われ、国家の基礎が定まる、と彼は言う。賈山が何故に明堂を定め、大学を造ることを上奏したのかは定かではない。ただ賈山伝の冒頭に、「言ふ所書記を涉獵し、醇儒爲る能はず」とあることからすれば、どちらとも言えは儒家系統に属する人物であったと思われる。そうだとすれば、先秦の儒家文献の影響を受けていたのであろう。

賈山が明堂を定め、大学を造りと、明堂と大学を同時に挙げている点は、大学が直ちに辟雍に結びつくか否かは検討を要する問題であるが、礼教を行い教化をする場所として複数のものを用いることを示唆している。しかし、この賈山の上奏文を文帝が採用したか否かは不明である。

賈山の上奏以後、文帝・景帝時代には明堂等の事はあらわれてこない。武帝時代に入ると急に新しい展開を見せる。『漢書』卷六、武帝本紀によると、武帝即位の年（建元元年＝前140）に

明堂を立てんことを議す。使者をして安車蒲輪もて、束帛に璧を

加えて、魯の申公を徴さしむ

とある。明堂建設にあたり、魯の申公を丁重に徴聘したのである。何故に魯の申公であるのか、より詳細な過程は『史記』卷一二、儒林伝、『漢書』卷二五上、郊祀志に見える。郊祀志によれば、

武帝初めて即位し、尤も鬼神の祀を敬ふ。漢興りて已に六十餘歳なり、天下艾安、縉紳の屬皆天子封禪し、正度を改めんことを望む。上儒術に郷ひ、賢良を招く。趙綰、王臧等文学を以て公卿と爲り、古を議し明堂を城南に立て、以て諸侯を朝せしめんと欲す。巡狩封禪歴服色を改る事を草するも未だ就らず。竇太后儒術を好まず。人をして微かに趙・綰等の姦利の事を伺はしめ、綰・臧自殺す。諸々の興す所皆廢と爲す

とある。趙綰、王臧は時の御史大夫と郎中令で、共に申公に学んだ者達である。即位したばかりの新進氣鋭の武帝は、儒家への志向を示した。しかし黄老を尊ぶ竇太后の反対にあつて頓挫する。竇太后が崩じた後、武帝はすぐさま儒家的立場に則った政治に移行出来なかったのは、国内的、対外的要因によるものであった。

右のような事情のため、次に明堂等が登場するのは三十年以上も後のことである。同じく武帝本紀に、

元封元年、夏四月癸卯、上還り、泰山に登り封ず。降りて明堂に坐す

とある。元封元（前110）年、武帝は東の海上巡狩より還り、泰山に封禪を行い、終了後下山して明堂に休息したという。しかしこの明堂と

は、臣瓚の注に、

郊祀志に初めて天子泰山に封ず。泰山の東北の隄、古の時明堂の處有る、と。則ち此れ坐す所なり。明年の秋乃ち明堂を作るのみとあるように、昔の明堂跡であつて、武帝時代に建設されたものではない。臣瓚の注の如く翌元封二（前109）年の秋になって実現する。同本紀は、

元封二年、秋、明堂を泰山の下に作る

と記す。これは泰山の下に明堂を建設したと言うだけで、明堂の性格（機能）は不明である。それが明確になるのは、さらに三年後の元封五（前106）年のことである。同本紀に

元封五年、春三月、甲子、高祖を明堂に祀り、以て上帝に配す。

因りて諸侯王列侯を朝せしめ、郡國の計を受く

とある。これによると、明堂とは高祖を祭祀し上帝に配祭する。そして各郡国諸侯王より計（報告）を受ける場所である。つまり明堂は祭祀を行う場所であると同時に政治的意味をも兼ねていて、その後も継続してゆく。なおこの元封五年の記事は、郊祀志下では、

是の歳（元封五年）に及び封を修む。則ち泰一、五帝を明堂の上

坐に祠り、高皇帝の祠坐を合して之に對す。……明年、泰山に幸す。

十一月甲子朔旦冬至の日を以て上帝を明堂に祀り、封を修むる毋かれとなつていて、上帝と泰一、五帝とを同一に解してよいのか否かの検討課題を残すが、高祖を祭り、上帝に配祀することに変化はない。さらに武帝本紀には、

太始四（前93）年、春三月、泰山に行幸す。壬午、高祖を明堂に祀り、以て上帝に配す。因りて計を受く。癸未、孝景皇帝を明堂に祀る。

とある。高祖だけでなく、孝景帝をも祭祀している。明堂は祖先の祭祀を行う場所であることがわかる。さらに諸侯王、列侯より計を受けることが確認できる。

以上を要するに、武帝時代になって本格的に明堂について論議されるようになった。しかし三朝の礼がとりあげられることはなかった。

建築された明堂についてみると、藤川氏は武帝時代の明堂制を即位当初と晩年とでは、儒家的色彩から宗教的・法術的色彩の濃いものへと性格が変化したと指摘されるが、必ずしもそうとは言えないのではないだろうか。建元元年の計画、計画の挫折、そしていよいよ明堂が建設され、祭祀が実施される元封五年、さらに天漢三年、太始四年と見てゆくと、その流れは一貫して全く変化なく、祖先の祭祀を行い并せて諸侯王列侯より計を受くという祭祀的・政治的意味の両者を有している。ただ強いて言えば、祖先の祭祀と言うけれども、実質的には開祖（高祖）のみを対象としていたのが、太始四年になり武帝の父景帝が祭祀の対象に加わることによって、祖先祭祀の場所としてふさわしいものになったと言える。

## 二

上述のように、武帝時代には、明堂の建設、そしてそこの祭祀の

実施までは存在したが、三朝の礼は成立していなかったと思われる。三朝の残り辟雍、靈台はいつ頃成立するのだろうか。後漢王朝の誕生を待たなければ三朝の礼は成立しないのだろうか。次に辟雍、靈台について見ることにする。

『漢書』卷五八、兒寬伝に、

議して古の巡狩封禪の事に放んと欲するに及ぶ。諸儒の對ふる者五十餘人、未だ定むる所有る能はず。是より先に、司馬相如病死し、遺書有り、功德を頌し、符瑞を言ひ、以て泰山に封するに足る。上其の書を奇として、以て寬に問ふ。寬對へて曰く、陛下躬ら聖德を發し、群元を統攝し、天地を宗祀し、百神を薦禮す……上之を然りとす。乃ち自ら儀を制し、儒術を采りて以て焉を文す。既に成り將に事を用ゐんとし、寬を拜して御史大夫と爲し、東のかた泰山を封するに従い、還りて明堂に登る。寬壽を上りて曰く、臣聞く三代制を改め、象を屬して相ひ因る。間者聖統廢絶し、陛下發憤して、天地に合指し、祖めて明堂辟雍を立て、泰山を宗祀す。六律五聲もて、聖意を幽贊し、神樂四合して、各々方象有り、以て嘉祀を承け、萬世の則と爲さば天下幸甚なり

とある。些か長文であるが状況をみてみよう。

兒寬は尚書を治め、孔安国に学んだ人物である。彼が卜式に代って御史大夫となったのは元封元年のことである。『漢書』卷十九下、百官公卿表）元封元年、二年とは、既述の通り泰山の封禪を行い、明堂建設の年である。武帝は古流の巡狩封禪を実施したいと思ったのであ

るが、五十余人の儒者は決定することができなかった。この「占の巡狩封禪」とは言う迄もなく、先秦時代の儒家の文献に現われものである。何故ならば、建元の挫折から脱して漸く明堂の実現に着手する時であり、また文帝十五（前165）年、趙人新垣平の封禪の祭祀詐欺事件が発生し、封禪の儀式が中止していたが、それが復活する時でもあるからである。

つづいて司馬相如の遺書に符瑞のことがあり、その中の泰山の封禪に関する事について武帝は兒寛に尋ねた。それに対し兒寛は儒家的立場から解答し、さらに上壽して、三代の改制は連綿と続いていくべきなのに、先頃聖人の遺業は廢絶してしまった。陛下は発憤して、天地に合わせ、始めて明堂、辟雍を立て、泰（太）一を尊び祀ると、六律五声や陛下の聖意がすみずみまで行きわたります。嘉祀をすすめて万世の法則とすれば、天下の人々は非常に幸いで、と答えた。

右の兒寛の話からいくつかの事がわかる。

- 一、武帝が行った祖先祭祀と上帝に配祀することは見えない。
- 二、泰山の封禪から明堂の祭祀が順序であること。
- 三、儒者達にも既に占の巡狩封禪の儀式次第がわからなくなっていること。

四、明堂と辟雍とを結びつけて認識する一部の儒者がいたこと。

この四点のうち、本論と直接係わる第四番目についてみよう。明堂と結びつけられた辟雍とは、漢の人々はこの様なものとして捉えていたのだろうか。明堂と同様に形態や構造面からではなく機能面からみる

ことにする。

#### 『白虎通義』六に

天子、辟雍を建てるは何ぞや。辟雍は禮樂を行ひ、徳化を宣ふる所以なり……雍は之を壅ぐに水を以てするは、教化の流行を象とれはなり。辟の言は積なり。天下の徳徳を積めばなり。雍の言爲る壅や、天下の儀則なり。故に之を辟雍と謂ふなり。

とある。この著者班固の考えでは、辟雍とは礼楽を行い、徳化を宣布する場所であり、天下の道徳や儀則を定め、広く知らしめる場所である。明堂が祖先祭祀を行い、上帝に配祀し、諸侯王列侯を朝せしめる場所であつたことからすると、礼楽を行い、徳化を行う場所である辟雍とは大いに関係があると思われる。しかし、武帝時代の辟雍は、兒寛伝以外に資料はなく詳しいことはわからない。

明堂は嘗てふれたように、昭帝時代以降見えなくなり、平帝時代に再び姿をあらわす<sup>1)</sup>。辟雍はどうであろうか。言う迄もなく武帝以降、政治の混乱、新しい儒家官僚の政界進出による主導権争いは、礼制面の混乱、整備にも影響を及ぼしている。前漢時代の礼制は元帝時代以降漸く落ち着きを見せる。その主人公達は韋玄成、匡衡、劉向、劉歆達である。辟雍も彼らの間でとりあげられることになる。

#### 『漢書』卷二、禮樂志に、

成帝の時に至り、犍爲郡の水濱に於いて古磬十六枚を得。議する者以為らく壽祥なりと。劉向是に因りて上に説きて、宜しく辟雍を興し、庠序を設け、禮樂を陳べ、雅頌の聲を隆にし、揖攘の容を盛

にし、以て天下を風化すべし。……成帝、向が言を以て公卿に下し議せしむ。向が病卒に會し、丞相大司空辟雍を立てんことを奏請す。長安城の南を案行す。宮表未だ作らずして、成帝の崩に遭ふ。羣臣引きて以て諡を定む

とある。成帝の時、瑞祥を得たことを理由に、劉向は辟雍を興し、庠序を設置し、礼楽をひろめ、雅頌を隆盛にし、揖讓の容体を盛大にして天下を風化せんことを説いた。劉向は班固と同じく、辟雍は礼楽を広め、徳化を主に天下を教化する場所と理解している。そして成帝も劉向の意を汲んで公卿達に議論させようとした。残念乍ら劉向の病死、成帝の崩御という二重の不幸が重なり、辟雍を興すことは実現しなかった。しかし、この辟雍建設論議は、儒家官僚達が進出した前漢後半の社会では以前のように沙汰止みになることはなかった。『漢書』卷三六、楚元王伝に、

哀帝の崩するに會ひ、王莽政を持す。莽少きとき歆と俱に黃門郎と爲る。之を重じて太后に白す。太后歆を留めて右曹太中大夫と爲す。中壘校尉、義和京非尹に遷る。明堂、辟雍を治めせしめ、紅林侯に封ぜらる。儒林、史卜の官を典つゝとらしめ、律曆を考定し、三統曆譜を著はす

とあるように、父向の後、劉歆も哀帝から平帝（王莽）時代にかけて、具体的内容は不明であるが明堂、辟雍を取扱っている。また律曆、三統曆譜の制定に関わり、以後王莽のブレーンとして政策担当者の役割を果たしていくことになる。

このように、成帝以降になると明堂と辟雍とはセットになって文献に現われてくる。これはまさしく古文学派の儒者達が進出してきたことに歩調を合わせていると言えるであろう。その事は文献の上でも明確に確認できる。平帝時代、王莽時代を次にみてよう。『漢書』卷十二、平帝本紀に、

安漢公 明堂、辟雍を立てんことを奏す

とある。王莽（安漢公）が明堂、辟雍を建設せんことを上奏したのである。平帝本紀では明堂、辟雍となっているが、同王莽伝上によると、是の歳（元始四年）（王）莽奏すらく、明堂、辟雍、靈臺を起し、学者の爲に舍を築くこと萬區、市、常滿倉を作り、制度甚だ盛んなり。樂經を立て、博士の員を益すこと、經各々五人。天下の一藝に通ずるもの十一人以上を教授するもの及び逸禮、古書、毛詩、周官、爾雅、天文、圖讖、鍾律、月令、兵法、史篇の文字有り、其の意に通ずる者を徴し、皆公車に詣らしむ

とある。是の歳は前後より元始四年である。始めて靈台が、明堂と辟雍と結びついて、三朝のセットの顔が揃う。遅くとも王莽はこの時期に三宮を一セットとして考えていたことがわかる。しかも六經の博士を含めて人数の増員をはかると同時に、それぞれの分野の専門家を募集する優遇策をとっているが、やはり逸礼、毛詩、周官、爾雅が含まれていることは注目すべきである。この三つの資料に劉歆の名前は直接に見えないが、彼の列伝を読むとき、やはり王莽のブレーンとして存在していると思われる。<sup>12)</sup>

### 三

王莽の三朝を一セットとする構想は、彼が漢王朝の篡奪する四年も前から具体化している。

王莽は三朝の礼をどのように考えていたのだろうか。劉歆と同じ様に、辟雍は礼樂を行い、徳化を宣布する場所としたのだろうか。セツトの一つとして新しく登場した霊台とはどんな場所であったのだろうか。劉歆の説は辟雍のように班固説に継承されているのだろうか。さまざまな問題が関連してくるが、霊台からみよう。『白虎通義』六に、

天子の靈臺有る所以は何ぞや。天人の心を考え、陰陽の會を察し、星辰の證驗を揅り、萬物の爲に福を無方の元に獲る所以なり

と記している。天子が霊台を有している理由として、天意と人道との關係を考え、陰陽の変化を察し、星辰の状態を觀察して、萬物の爲に無限の幸福を獲得する場所、つまり自然現象の異変の有無を觀測し、それに対応すべき処置を講ずる場所<sup>11</sup>天文台が必要であるとしている。ところで、三朝のうち明堂、辟雍はセットではなく、それぞれ個別に独立して取扱われるのに対して、霊台は必ず明堂と組合わされている。『白虎通義』六も上文に引き続き、

天子の明堂を建てるは、神靈に通じ、天地に感じ、四時を正し、教化を出し、有徳（者）を崇び、有道（者）を重じ、有能（者）を顯かにし、有行者を褒むる所以なり……（明堂）は布政の宮、國の陽に在り

とある。班固は、明堂とは神靈に通じ、天地に感じて四時を正して、教化を行い、有徳者、有道者を崇び重視し、有能者、有行者を顯彰し褒章する場所であり、布政の宮でもあると言う。前半は霊台と通ずる面もあるが、有徳者や功績者の顯報を行う布政の宮に重点が置かれている。その代り武帝時代にあた祖先の祭祀や上帝への配祀は見えない。では、王莽はこの点をどのように考えているのかを次にみよう。

『漢書』平帝本紀に、

元始五年春正月、明堂に祫祭す。諸侯王二十八人、列侯百二十人、宗室の子九百餘人徴されて祭を助く。礼畢り、皆戸を益す。爵及び金帛を賜ひ、秩を増し史に補すること各々差有り。

とある。この元始五（5）年では、明堂にて祫祭<sup>12</sup>祖先を祭礼し、諸侯を朝勤させ、儀式終了後に益封、賜爵、金帛などの恩賞を与えている。明堂は武帝の時と同じ儀礼的、政治的両面をもったもので、班固の解釈と相違している。最もこの時は、同年の条に、

義和劉歆等四人使として明堂、辟雍を治む。漢をして文王の靈臺、周公の洛を作ると符を同じうせしむ

とあることに關係あるのかもしれない。元始五年は、平帝が崩じ王莽が摂皇帝として出発する年でもある。翌年、居摂と改元すると、王莽伝上は、

居摂元（6）年正月、莽上帝を南郊に祀り、春を東郊に迎へ、大射禮を明堂に行ひ、三老五更を養ひ、禮を成して去る

とある。上帝を南郊に祀り、後漢の明帝時代には辟雍で行われた大射

礼を明堂に行い、三老五更の場所是不明である。兎も角、三朝の礼のセットが揃って出てくるが、明堂一つをとってみても、元始五年では祫祭であったのに、ここでは大射礼とく違っている。やはり王莽は天下取りの途中にあって、礼制の整備まで手が廻らなかつたのであろうか。しかし居摂以後の資料を見る限りそうとも言えない。王莽の新王朝建国後を追ってみると、次のようになる。(いずれも王莽伝)

- ① 始建國元(9)年、其の廟當に作るべきは、天下初めて定まるを以て、且つ明堂、太廟に祫祭せんとすればなり(中)
- ② 始建國四(12)年、莽明堂に至り、諸侯に茅土を賜ふ(中)
- ③ 天鳳四(17)年六月、更に諸侯に茅土を明堂に授く(下)
- ④ 天鳳六(19)年、初めて新樂を明堂、太廟に獻るとき、群臣始めて麟章の弁を冠す(下)

右の四例のうち、②と③は諸侯封建の場所として明堂を使用している。また①、④も明堂と太廟を区別していることから、恐らく祖先祭祀は太廟で行われたのであって、明堂ではなかつたであらう。このように見てくると、王莽は自己の野望を果たすまで(元始居摂)はそれほど大きな変革をせず、明堂にも祖先祭祀と諸侯朝勤の両方の意味をもたせていたと思われる。新王朝建国後になると、藤川氏は「王莽時代、明堂を以って祖廟と考える」、「明堂とは三宮の一、礼教の堂であり、そこには太祖を奉祀するのであって、儒家的王道政治を行なう場所」とされるが、必ずしもそうとは言えない。それよりもむしろ、

上の四例の中の①、②、③に見られることからすれば、「昔周公、諸侯を明堂の位に朝せしむ」(『禮記』明堂位)、「明堂は諸侯の尊卑を明らかにするなり」(同)「明堂は古天子布政の宮なり」(『太平御覽』卷五三三引『禮記外傳』)であって、前引の最後の部分「儒家的王道政治を行なう場所」≡先秦時代の文献に見える政治的な役割が強いように思われる。しかし、元始四年の三朝の建設は、王莽時代にはその機能を十分に果たしたとは言えないが、決して無意味なものではなかつた。王莽が目指した先秦文献に見える世界、その世界の中でそれぞれの役割をもった明堂、辟雍、靈台はそのまま放置されることなく後漢王朝に継承されていく。但し王莽時代の三朝の建物ではなく、新しく再建された三朝である。更始元(23)年、各地に王莽打倒ののろしがあがり、王朝の末期的状態が露呈してくると、王莽、新王朝に対するそれまでの苦しみ、怨みが一挙に爆発する。その様子を『漢書』土莽伝下は

(更始元年)更始將軍史諶將に渭橋を度らんとするに、皆散走す。

諶空しく還る、衆兵莽が妻子父祖の冢を發掘し、其の棺槨及び九廟、明堂、辟雍を焼く、火城中を照す

と伝えている。王莽の妻子、父祖の墓を暴き、棺槨を焼き払っただけでなく、九廟、明堂、辟雍全てが灰燼に帰してしまつた。

後漢王朝を再興した光武帝は、祖先祭祀を再び宗廟で行うようにした。その上で別に『後漢書』光武帝紀下の中元元(56)年の条に、

是の歳、初めて明堂、靈臺、辟雍及び北郊の兆域を起す



とあるように、「初めて」三朝を起した。中元元年は、光武帝即位後三二年目であるが、王莽末年に全て無くなってしまったため、既存の施設でなく、新規に始めたために「初めて」と言ったのであろう。しかし光武帝は、后土の祭祀を翌年に実施したのみで、三朝の礼を行うことなく明帝にバトンタッチすることになる。

それ以後の明帝が行った礼制改革については前稿に述べた通りである。ただ一言追加するならば、明帝の永平二（59）年の三朝の礼——正月に光武帝を明堂に宗祀し、礼終了後靈台に場所を移し、そしてその後には辟雍で大射礼や養老礼を行うというパターンは従来なかった全く新しい儀式次第である。三朝にそれぞれ独立した役割をもたすことになる。明堂では祖先の祭祀や五帝の祭祀は従来通り行われるが、諸侯の朝勤による「受計」はなくなったこと、明堂、靈台はセットになるが、辟雍はそれらとは別になった形跡がみられる。

＊ ＊ ＊

明堂、辟雍、靈台の三者が明確にセットとして取扱われるようになったのは平帝時代、実質的推進者は王莽である。しかしその萌芽はやはり元帝以降の古文学派の進出による尊儒の風潮と大いに関係がある。また王莽時代に三朝制は論議され、行われようとしたが完全には確立しなかった。それは王莽が漢王朝篡奪という野望実現の為に急激な変革を求めることができなかったこともあるだろうし、彼自身王朝を建国し、政治を行うにあたり『周禮』を中心に求めながら、占、今文併

用<sup>18)</sup>という不徹底さからくるものであったのかもしれない。

またそれとは別に、何故に光武帝は晩年になって三朝制を実施しようとしたのか、後漢王朝の早急な基礎固めの一施策であったとはいえず、明帝が永平二年に三朝で、それぞれの儀式を行うことにした動機は何であったのかは別に考えなければならぬだろう。

（五・九・五）

注

（1）拙稿「上陵の礼よりみた明帝の礼制改革について」（『國土館史学』創刊号 平成五年五月）以下前稿とはこれを言う。

（2）藤川止數『漢代における礼学の研究』（風間書房 昭和四十三年昭和六十年増訂版）、三條彰久『先秦辟雍小考——中国古代の学校の原像』（『西と東』）前嶋信次先生追悼論文集『汲古書院 一九八五年六月』尚お、後者論文の注に、関野雄「台榭考」、森三樹三郎「学校の原始的性格」、橋本増吉「靈台考」、赤塚忠「辟雍について」、柳本実「辟雍について（一・四）」等が挙げられている。

（3）藤川氏 前掲書によると、先秦時代の明堂観には、（一）明堂を王道政治を行なう所とする説、（二）天人関係を調和する所とする説の二つがある、という（二四二ページ）

（4）『周禮』以外に、『大戴禮』威德篇、『禮記』明堂位、『孝經援神契』、『禮記外傳』等の記載がある。『太平御覽』卷五三三 禮儀部十一 明堂所収

（5）藤川氏 前掲書 二二七・二二八ページ

（6）『史記』儒林伝の考證に

趙綰爲御史大夫、王臧爲郎中令、皆學于申公  
とあるによる。

(7) 拙稿「樂府」について——特に成立年代とその背景について——  
『国士館大学文学部創設二十周年記念論集』昭和六十一年十月 九六ページ

(8) 藤川氏 前掲書 二四二・二四六ページ

(9) 『漢書』卷六 武帝本紀の天漢三(前98)年の条は、  
三月、行幸泰山、修封、祀明堂、因受計  
に作る。

(10) 漢代の封禪は文帝時代が始見であるが、この新垣平の事件とは、『漢書』卷二五上、郊祀志に、

(文帝)十四年(以新垣平言)以郊見渭陽五帝……於是貴平至上大夫、  
賜累千金。而使博士諸生刺六經中作王制、謀議巡狩封禪事。……其明年、  
……人有上書告平所言皆詐也。卜吏治、誅夷平、是後文帝怠於改正服鬼  
神之事……

とある。

(11) 拙稿「禘祭・禘祭の成立について」(『中国史研究』第八号 一九八四年)

(12) 『漢書』卷三六、楚元王伝の劉歆の条に、  
哀帝初即位、大司馬王莽舉歆宗室有材行、……歆乃集六藝羣書、種別爲  
七略……及歆校祕書、見古文春秋左氏傳、歆大好之……及歆親近、欲建  
立左氏春秋及毛詩、逸禮、古文尚書皆列於學官  
とある。

(13) 『漢書』卷二二、禮樂志に、

及上莽爲宰衡、欲燿衆庶、遂興辟雍、因以篡位、海内畔之  
とあり、彼が宰衡になったのは元始四年のことである。(平帝紀)。

(14) 注(11) 参照。

(15) 藤川氏 前掲書 二五〇・二五二ページ。

(16) 注(1) に同じ。

(17) 明帝以降の記事を『後漢書』の本紀より抜粋すると、  
章帝建初三(78)、元和二(85)、和帝永元五(93)、順帝永和元(136)、  
漢安元(142)等がある。これは明堂或いは明年と靈台での祭祀である。そ  
れに対して辟雍での祭祀の記載は、和帝永元十四(102)、靈帝熹平六(177)  
の二例である。

(18) 葛志毅「王莽改制的經学文化基礎」(『求是學刊』(哈爾濱)一九九三  
年二月《復印報刊資料 先秦・秦漢史》一九九三・五所収)。